

日本史A課題プリント4

2 蘭学と国学の普及－新しい学問・文化がひろがったのはなぜか－教科書 p.26-27

【蘭学のはじまり】

蘭学は幕藩体制の揺らぎの中で、新たな知識や思想によって社会の変化に対応するために、8代将軍吉宗が導入して以来盛んになった学問で、オランダ語を通じて西洋の学術・文化・技術を学ぼうとするものである。(①)・前野良沢らによって(②)が刊行されると、蘭日辞書、オランダ語の入門書などがつくられたが、蘭学のもつ合理主義的な部分が儒学と相容れない場合もあった。そこで幕府は(③)をおいて翻訳事業をすすめるなど蘭学を統制下におき、蘭学者が幕府政治を批判すると厳しく弾圧した。1837年には(④)で高野長英や渡辺崋山らが処罰された。

【国学のはじまり】

国学は儒学や仏教などの外来思想を批判し、日本古来の道を重視する学問である。国学は古典研究を通して深められ、(⑤)によって大成された。また、平田篤胤は国学に神道の考え方を加えた(⑥)をひろめた。これは幕末の尊王攘夷運動に影響を与えた。一方幕府は、(⑦)を正学とし(寛政異学の禁)、儒学によって身分秩序の引きしめをはかった。そして、国学学問所である和学講談所を設け、盲目の学者(⑧)の研究を助けた。

【社会批判思想のめばえ】

18世紀後半以降、封建社会を批判しそれを改めようという者があらわれた。藩営専売を奨励した海保青陵など「金儲け」を積極的に認める点に新しさがあった。江戸の医者(⑨)は皆が生産に携わる「万人直耕」の考え方のもと、差別のない理想社会を説いた。大坂の(⑩)では合理主義が重視された。

【庶民文化と民衆思想】

文化・文政期には庶民文化が全国へひろまった。歌舞伎役者でもあり脚本作家であった鶴屋南北の活躍で歌舞伎は人気を集め、喜多川歌麿、(⑪)、東洲斎写楽らの登場で(⑫)は全盛期を迎えた。出版や貸本が発達して小説や俳諧、川柳、(⑬)なども多くの人々に親しまれた。こうした文化の受容は庶民の読み書きの能力の高さと関係が深い。子どもたちは(⑭)で読み書きなどを習った。19世紀には荒廃する農村も増えたため、(⑮)や大原幽学は農村の立て直しに努力した。

3 開国と社会の変動－黒船は幕藩体制をどう揺るがしたのか－教科書 p.28-29

【開国】

19世紀に入ると、欧米諸国が日本にも接触するようになった。中国では（①）に敗れた清が、勝利したイギリスとの間に清に不利な南京条約むすび、貿易が開始された。一方アメリカは、対中国貿易船や捕鯨船の補給港を確保するため、1853年6月、司令官（②）を派遣して軍事力を背景に開国を迫った。翌年に再来した（②）の圧力によって、幕府は開国を決断し1854年に（③）をむすんだ。幕府は（④）・箱館の開港、燃料・食料・水の提供、領事の駐在、一方的な（⑤）を認めた。

【政争の激化】

開国要求に対して老中（⑥）はこれを朝廷に報告し、諸大名や幕臣にひろく意見を求めると、水戸藩の徳川斉昭などの有力大名が発言力を強め、幕政に参加するようになった。従来 of 譜代大名中心の幕藩体制を維持したい彦根藩主（⑦）は、これらの大名と激しく対立した。さらに13代目将軍家定の後継をめぐる問題がおき、徳川慶福を推す譜代大名らの南紀派と（⑧）を推す一橋派が対立を深めた。その後、大老となった（⑦）は天皇の許可を得ずに通商条約調印を強行し、調印に反対した勢力を（⑨）で厳しく弾圧した。

【開港と経済の変動】

日米和親条約にもとづいて下田に着任した（⑩）は、中国情勢や欧米諸国の脅威を説きながら、通商をせまった。幕府は1858年（⑪）をむすび、（⑫）・（⑬）・（⑭）・（⑮）の開港と江戸・大坂の開市を定めた。しかし、日本側には関税自主権がなく、アメリカに（⑯）を認めるといった日本に不利な内容であった。日本はアメリカの他に、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとも同様の条約を結んだ。これを総称して（⑰）という。翌年、（⑱）で貿易が開始され、日本は世界市場と繋がり大きな経済変動に引き込まれた。貿易相手国の中心は（⑲）で、（⑳）・茶などが輸出され、毛織物・綿織物や武器などの工業製品が輸入された。輸出の増大は物資不足と流通の混乱を招いたため、幕府は（㉑）を出して対応しようとしたが、効果はほとんどなかった。また、国内の銀価格に対する金価格が欧米より低かったために、大量の（㉒）が海外に流出した。これを貨幣改鑄によっておさえたため、貨幣価値が下落し、物価高騰が民衆や下級武士の生活を圧迫した。